

「ひらがなでさくら」

宮崎和彦

【あらすじ】

太平洋戦争末期の激戦地ルソン島で、学徒兵の西達治（25）は英語が話せたが故に生き延びる。そして戦争の心の傷が癒えないまま迎えた1948年の春、西を尋ねてきた学友の安斎勇（28）から、8月に実施する「日本人の読み書き能力調査」の調査委員会に誘われる。専門は米文学の西は畑違いだと断るが、幼い頃から想いを寄せる近所の森川洋子（28）と再会し、思わず見栄を張って「読み書き能力調査」の仕事をすると言ってしまう。

西は日本語の難しさを痛感しながら、クセの強い言語学者の田尻清二（34）や西と同じルソン島の生き残りの河嶋弘（29）らと共にテスト問題の作成に取り組む。

一方、家では洋子が居候することになる。未だ戦争から帰ってこない夫の家族と折が合わずに逃げてきたところを西の母親の西千代（50）が匿ったようだ。西は洋子が結婚していたことに少なからずショックを受ける。

そんな折、西は今回の調査の成績が悪かったら、日本語が廃止になるウワサを知る。「言葉が違うから戦争が起きる」と感じていた西は日本語がなくなっても構わないと考える。しかし、洋子が夫と女の子が生まれたら名前をひらがなで「さくら」にすると約束していたという話を聞いて、洋子のためにも日本語を守ろうと決意をする。

調査が本番へ向かう中、洋子は夫が戦死しているにも関わらず、西が帰還したがために夫も帰還する希望を持ってしまった苦しみを西に打ち明け、夫の弟と結婚することになった話をする。西は洋子を守りたいと思いがながら、あと一言が出ない。

そして迎えた「読み書き調査」本番。結果は好成績になるとみられ、日本語が守られたことは明確であった。

そして、去っていく洋子を捕まえた西は昔からずっと言えなかった一言、「好きだ」と日本語で伝えるのであった。

【登場人物表】

西達治（25）（26）（28）

元学徒兵・読み書き調査委員会副手

森川洋子（26）（28）西の幼馴染

安齋勇（28）

西の元学友・読み書き調査委員会副手

西千代（50）（52）西の母親

河嶋弘（29）読み書き調査委員会副手

田尻清二（34）読み書き調査委員会助手

池田正雄（32）西の上官・分隊長

ジョナサン・ダニエルズ（24）

アメリカ軍二等兵

佐々木一郎（20）新人調査員

細見金之助（56）古本屋の主人

復員兵 1

復員兵 2

大学の事務員 1

大学の事務員 2

若い男 1

若い男 2

○ルソン島・ジャングル

T「1945（昭和20）年1月　　フィ  
リピン・ルソン島」

陽が差さないほど木々に覆われた密林。  
やせた体にボロボロで汚れた軍服の西  
達治（25）が身を潜めている。

襟には伍長の階級章。  
手には三八式歩兵銃をすがるように持  
っている。

他に5人ほどの日本兵がいるが、全員  
気力はなく疲れ果てている。

なぎ倒される木々の音と戦車のキヤタ  
ピラ音が遠くから聞こえる。

分隊長の池田正雄（32）。

池田「西」

西「……」

池田「おい！　　西！」

西「はっ！」

池田「やれ！」  
池田が三式戦車地雷を渡す。

西「今から埋めても間に合わないかと」

池田「せからしか！　お前が戦車下に潜れ  
ばよかばい」

他の兵が西の三八式歩兵銃、弾入れ、  
九九式手榴弾を奪い取る。

池田「西伍長！　最期くらい勇ましゅうやっ  
てこい！」

西「はっ！」

敬礼するが足が震えて動けない。

池田が十四年式拳銃を突きつける。

慌てて駆け出していく西。

くぼみに身を隠す。

近づく戦車のキヤタピラ音。

呼吸が乱れていく西。

腕の中で戦車地雷を抱きしめる。

サブマシンガンの銃声が響く。

池田の声「降参や降参や！　撃ちなすな！  
助けてくれ！」

再び響くサブマシンガンの銃声。

日本兵たちの悲鳴が聞こえてくる。

やがて沈黙が西を包む。

西の呼吸がさらに乱れていく。  
前の斜面からアメリカ軍二等兵のジョ  
ナサン・ダニエルズ(24)が滑り落ち  
てくる。

ダニエルズ「Shiti.Hmm?」

目が合う西とダニエルズ。

ダニエルズ「GOD DAWN IT!」

ダニエルズが慌ててM1A1トンプソ  
ン・サブマシンガンを西に向ける。

西は慌てて地雷を突き出す。

西「うわああああ！」

サブマシンガンと地雷で対峙する二人。

ダニエルズ「DROP THE FUCKING WEAPON!」

西「てめえが銃を捨てる！ 死にてえのか！」

ダニエルズ「LIE DOWN! LIE DOWN!」

西「てめえが横になれ！ ああああ！」

ダニエルズ「I'LL SHOOT YOU!」

西「撃ってみろ！ 道連れにしてやる！」

ダニエルズ「I'LL SHOOT YOU!」

西「人の話聞いてんのか！ コノヤロー！」

ダニエルズ「I'LL SHOOT YOU!」

西「人の話聞いてんのかって言ってんだよ！

Do you understand what I'm saying! Shiti!」

ダニエルズ「WHAT?」

突然の英語に戸惑うダニエルズ。

西「DO YOU UNDERSTAND WHAT I'M SAYING!

SHITI! IF YOU SHOOT ME WITH THIS MINE, WE

ARE GOING TO HEAVEN TOGETHER! (俺の

言っていることが分からねえのか！ お前

が撃つてこの地雷に当たれば、お前も天国

まで吹っ飛ばす！)」

ダニエルズ「Speak English? (英語話せるの  
か?)」

銃を下ろすダニエルズ。

西「……」

ダニエルズ「OK, we are not going to die  
together. (JJJJと一緒に死ぬことはなす)」

西「The world is a fine place and worth the  
fighting for. (JJの世界は美しく、戦う価値

がある)」

ダニエルズ「Hemingway? (ヘミングウェイ?)」  
西「Don't lie. Where is the fine place? (嘘をつくなよ。どこにそんな世界があるんだ)」

西、完全に戦意を失い座り込む。

その目からは涙が止めどなくあふれる。

ダニエルズ「:::」

他の米兵たちが集まってくる。

三等軍曹の米兵がM1911ハンドガンを西に向ける。

ダニエルズ「Sergeant. He is not our enemy anymore. (分隊長。彼は我々の敵ではありません)」

ハンドガンを下ろす三等軍曹。

西、涙が止まらない。

### ○復員輸送艦・甲板

T「1946 (昭和21)年3月」。

東京湾を進む復員輸送艦。

西が海へ嘔吐している。

復員兵1が西(26)を笑う。

復員兵1「目の前は浦賀だっていうのに、最後まで情けないヤツだな」

西の手には「For Whom the Bell Tolls (誰がために鐘は鳴る)」のペーパーバックが握られている。

復員兵1「アメリカ土産か？」

おもむろにペーパーバックに触ろうとする復員兵1。

西がとっさにかばう。

復員兵1「大学出ただけで下士官になったクセに、偉そうにするんじゃねえ」

他の復員兵たちが騒いでいる。

復員兵2「桜だ！ 桜が見えるぞ！」

陸の方を見ている復員兵たち。

西もつられて顔を上げる。

海岸沿いに咲いている桜の木が見える。

笑顔と涙にあふれる復員兵たち。

桜の木の下に森川洋子(26)が立っているのが見える。

西「洋子さん？」  
船を見つめている洋子。  
やがて船は遠ざかり、洋子が見えなくなる。

○メインタイトル「ひらがなでさくら」

○海沿いの公園

桜が咲いている園内。  
西が慌てて走ってくる。  
ちらほらと人はいるが洋子はいない。  
呆然と立ち尽くす西。

○西家・玄関

空襲の被害は受けていない一軒家。  
西が立っている。  
あがりかまちには西千代（50）。  
呆然と西を見ている。  
西「ただいま戻りました」  
千代が家の中へ走っていく。  
西「母さん！ 母さん！」  
慌てて追いかける。

○同・茶の間

西が入ってくる。  
仏壇に位牌が二つ並んでいる。  
一つは西の父親の位牌。  
千代がもう一つを床に投げつける。

西「母さん！ 何をして……！」

壊れた位牌に「西達治」と書いてある。  
西「僕のですか？」

千代、続けて骨壺を床に叩き付ける。  
割れた骨壺の中から、石ころが数個出てくる。

西「……！」

千代が西に抱きついて泣きわめく。  
西「も、申し訳ございませんでした」  
西も涙が止まらない。

○同・階段

西が上がりってくる。

○同・廊下

西、部屋の前で深く深呼吸。  
思わず頬が緩む。  
引き戸を開ける。

○同・西の部屋

部屋の中には、空の本棚があるだけで、  
他には何も無い。  
啞然とする西。

○同・台所

西「何も無いです！ 何も無いですが！」  
千代は小豆を洗っている。

千代「何がないんだって言うの。足はちゃん  
とついてるじゃない」

西「服！ カバン！ 僕の物全部です！」  
千代「あんたが死んだって知った近所の連中  
が持って行っちゃまったんだよ。物々交換だ  
って」

西「そんなこと！ 満州、ルソン、アメリカと  
だいぶ遠回りをしてしまいました。こう  
して僕は家に帰って……」

千代が小豆を西に投げつける。

西「いつ！」

千代「兵隊だけが死にもぐるいだったなん  
て思わないでちょうだい！ 私だって食べ  
なきゃ生きていけなかったのよ！」

千代の凶変に啞然とする西。

西「も、申し訳ございませんでした」  
去ろうとするが恐る恐る戻って来て。

西「あのお……ちなみに本は？」

千代「あれも全部持って行かれたわよ」

西「誰が持って行ったかは？」

千代「いちいち覚えてないわよ！ あんたの  
本って英語のばかりじゃない。敵国語の本  
なんて持ってたら憲兵に何されるか」

西「……」

○大学・事務室

西「だが中年の事務員1と話をしている。

西「ですから僕はまだ卒業してないんです。

卒業前に学徒出陣で」

事務員1「その学徒出陣で繰り上げ卒業扱いになってるって、さっきから言ってるだろ。

卒業した人間に復学が認められるか」

西「僕たちは勝手に卒業させられたんです」

事務員1「生きて帰って来て文句を言うな！

うちの学生が何人死んだと思ってる！」

西「……」

窓ガラスが突然割れる。

とっさに床に伏せる西。

目の前に野球ボールが転がってくる。

事務員1が外に向かつて吠える。

事務員1「誰だ！　こんなところで野球してるのは！」

呼吸が乱れる西、冷や汗が止まらない。

女性の事務員2が西をのぞき込む。

事務員2「大丈夫ですか？」

西「あ、はい。すみません」

どうにか起き上がる西。

再び衝撃音が響く。

身を縮める西。

廊下で机を運んでいた学生たちが、落

としてしまったらしい。

西「……」

女性の事務員2が散らばったガラスを

片付けている。

西「あつ。僕も手伝います」

慌てて駆け寄る。

机に置かれたインクをひっくり返す。

あたりに広がる黒いインク。

西「すみません！」

自分の手が黒く染まっている。

恐怖に引きつっていく西の表情。

○西家・西の部屋

西（28）が布団から飛び起きる。

西「うわあああああ！」

呼吸が乱れて汗が止まらない。

T「2年後。1948（昭和23）年3月」。

部屋はカーテンで締め切られて薄暗い。外から安齋と千代の声が聞こえる。

千代の声「おかえりください！ 息子は名誉の戦死をいたしました！」

安齋の声「そんなはずはありません！ 失礼します！」

千代の声「ちよっと！ 待ちなさい！」

どかどかと階段をあがってくる音。

安齋勇（28）が部屋に入ってくる。

安齋「西！」

西に抱きつく安齋。

安齋「良かった！ 良かった！ 本当に生きてたんだな！」

西「誰だよ」

安齋「俺だよ俺！ 安齋勇！ 外語学校の！

撞球倶楽部の！ 覚えてないのか！」

西「安齋……」

安齋「顔見て思い出せ！ GutenMorgen!」

安齋がカーテンを開ける。

明るくなる部屋。

無精ヒゲに体はやつれ、生気を一切感じない西が現れる。

床には服とゴミが散らばり、本棚にはホコリまみれの「For Whom the Bell

Tolls」のペーパーバックだけがある。

西を見て絶句する安齋。

西「安齋か。お前、少し太ったか？」

安齋「何があった？」

西「何って……戦争」

安齋「西。病院に行くぞ。俺の知り合いがいるところがあつてな。ついてこい」

千代（52）がやってくる。

千代「病院なんてやめてちょうだい！ こんなの近所に知られたら何て言われるか」

安齋「西は病気です。戦争帰りの人たちがたくさんやられているんです。ひどくなると

自死することも！」

千代「心が弱いだけよ。情けない！」

西「はずつと黙り込んでいる。」

安齋「西。少し外出ねえか？」

安齋「玉突きのレストランをする。」

安齋「なっ？」

西「……」

### ○撞球場

複数の玉突き台が並んでいる。

隅の台に西と安齋がいる。

西はやる気なく床に座っている。

球を撞く安齋。

安齋「ああ！ くそっ！」

安齋「ああ！ くそっ！」

安齋「この左手がもつと動けば。」

西「なぜだ？」

安齋「なぜって？ 俺、小さいときに骨肉腫

やつてるの知ってるよな？」

西「なぜ俺の所に来た？」

安齋「ああ。昨日、福田教授から二年前に大学

で西を見かけたって話聞いてな。急に倒れ

て大騒ぎになったとか」

西「……」

安齋「西。帰って来てたなら教えろよ。俺はお

前も戦死したとばかり」

西「ああ」

安齋「今仕事は？」

西「工場」

安齋「工場？ お前が？」

西「土方とかもやったな。水道つなげたり」

安齋「研究室に一日中こもっていたお前が肉

体労働なんて」

西「できるワケがなかった。どこも長続きは

していない」

安齋「西。今な、人手が足りないからって誘わ

れてる仕事があつてな。言語に関する調査

なんだが、俺と一緒にやらねえか？」

西「お前の研究対象はドイツ文学だろ。俺は

アメリカ文学。ドイツ語なんてできるか」  
安齋「やるのは日本語だ」  
西「日本語？」  
安齋「8月に世界でも前代未聞の規模で調査をやるんだ。日本人がどれだけ日本語を読めて書けるかって」  
西「やる意味が全く分からねえな。日本語くらい誰でも読めて書けるだろ」  
安齋「これからの国語の改良のために、一度日本国民がどれほど日本語を使えるのかきっちり調べるみたいだな。問題作る人間が足りないとかで、俺みたいな駆け出しのしつこいドイツ文学の人間にまで副手をやれと」  
西「俺には関係ねえだろ。別に研究者でもないし」  
安齋「この調査には言語学のお偉い先生方もいる。繋がりができれば、文学研究の職に就くこともできるかも知れないだろ？」  
西「生等もとより生還を期せず」  
安齋「……」  
西「俺はその誓いを破って帰って来ちゃったんだ。表向いて生きられるかって」  
安齋「戦争は終わったんだ」  
西「殺し合いが終わっただけだ」  
安齋「西。俺たちは生き残ったんだ。前に進むしか」  
西「兵隊に行かなかったヤツが言うなよ」  
安齋「……」  
西「悪い。でも今日来てくれたことは感謝してる。他の連中も集まれたら、その時には玉突きくらいできるよ」  
安齋「他の連中は一人もいないんだよ」  
西「……」

○路上（夕）

西が歩いている。  
突然、破裂音が響く。  
思わず身を伏せる西。  
近くで子供たちが爆竹で遊んでいる。  
西、大きくため息を漏らす。

○古本屋・表（夕）

西が古本屋の前を通り過ぎる。

すぐに戻ってきて中をうかがう。

ガラス窓越しにたくさんの本が並んでいるのが見える。

西、扉を開けようとするが一步踏み出せず去ろうとする。

中に入ろうとした森川洋子（28）とぶつかる。

地面に転がる西。

洋子「ごめんなさい！ 大丈夫ですか？」

西「すみません」

立ち去ろうとする西。

洋子の声「達治さん？」

西、無視して歩き出す。

洋子の声「達治さん。私です。洋子です」

西「……。洋子さん？」

思わず振り返る。

洋子を見て呆然とする。

洋子「ご無事だったんですね。私、達治さんは

戦死なされたとはかり……」

西「……」

洋子「お疲れ様でした」

頭を下げる洋子。

西「ご、ご心配をおかけしました」

頭を下げる西。

洋子の頬が緩む。

西の目は泳いでいる。

西「あ、えっと……。こちらにご用で？」

洋子がつっさにカバンを抱きかかえる。

西「？」

洋子「ちょっと歩きますか？」

西「……」

○桜並木の道（夕）

満開の桜。

西と洋子が並んで歩いている。

洋子「本当に良かったです。お母様もお喜びになったでしょう？」

西「喜ばれたと言えれば喜ばれましたけど、昔と比べて妙に怒りっぽくなってまして。洋子さんのところはお変わりなく？」

洋子「うちは二人とも空襲で」

西「……」

洋子「もう気持ちは落ち着いてますので」

西「……」

洋子「達治さんって、英語のお勉強されていきましたよね？ やはりお仕事もそのようなご関係のことをやられて？」

西「はい。いいえ」

洋子「どちらでしょうか？」

西「えつとですね……」

洋子「私、達治さんみたいな優秀な方が将来どのようなご職業に就かれて、ご活躍されるか。楽しみだったんです」

西「実を見せろ洋子。」

西「実をいうと今は何も……」

西「西を見つめる洋子。」

西「実をいうと日本人の読み書きがどれくらいできるかを8月に調査するらしくて、その問題作成に誘われているんです！」

洋子「まあ！ と申してみましたが、そのよ

うなことをしてどのような意味が？ 皆、

日本語は読めて書けるかと」

西「これからの国語の改良のために、一度日本国民がどれほど日本語を使えるのか調べる必要があるのです。問題作る人間が足りないとかで、僕みたいなまだ研究者でもなければアメリカ文学の人間にまで声が掛かりまして」

洋子「やっぱり凄いですね。達治さん。私なんて、達治さんからたくさん本をお借りしてましたのに女学校では及第点ばかりで」

西「洋子さんが及第点ですか！」

洋子「特にお裁縫がからつきしでした」

西「……」

洋子「でも、本当に達治さんがご無事で良かったです」

西「洋子さんこそ」

笑顔を見せる洋子。

西「今もお住まいはこら辺で？」

洋子「いえ。うちの近くに古本屋がありませ  
んのので」

西「今でも本読まれているんですね」

洋子「はい。それに……」

桜を見上げる洋子。

つられて西も見上げる。

西「洋子さん、もしかしてなんですが二年前、  
浦賀の桜のところで」

桜を見つめている洋子。

西「洋子さん？」

洋子、我に返って。

洋子「では、私は駅に戻りますので」

西「はい。お気を付けて」

洋子「またいつか、日本語調査の話聞かせて  
くださいね」

西「はい。またいつか」

洋子「また。またお会いしましょうね」

笑顔を残して去っていく洋子。

西、その背中を見つめる。

○文部省教育研究所・外観

T「文部省教育研究所 東京都品川区」  
2階建ての三角屋根の建物。

○同・廊下

大勢の人々が忙しなく行き来している。

西と安齋がその中を歩いている。

西はヒゲを剃って髪も整えている。

安齋「西。お前、何があった？」

西「何がつてなんだ？」

安齋「いや。なんでもない」

○同・調査委員会室

西と安齋が入ってくる。

T「読み書き能力調査委員会中央企画・  
分析・管理班」

大勢の調査員たちが、机に向かい作業  
をしている。

机や棚には国語辞書、新聞の束、書類  
が山積みされている。

安齋「委員会には言語学やら統計学やらの先生までいるらしいが、俺たちはその先生方の助手の副手。ようするに初年兵な」

西「最悪だな」

安齋「えっと……。お前の席、聞いてくる」

去っていく安齋。

部屋を見渡す西。

近くの机の上にある新聞を手にする。

西「……」

河嶋「河嶋弘（29）が西から新聞を奪う。」

河嶋「勝手に触るな！」

西「西、驚いて河嶋を見る。」

河嶋「すみません！」

河嶋「お前アレか？ 安齋が連れてくるって言った」

西「はい。西達治と申します。よろし……」

河嶋「安齋と同じ大学だろ。やれんのか？」

西「誠心誠意努めます！」

河嶋「河嶋「階級は？」

西「カイキュー？」

河嶋「お前、徴兵逃れでもしたのか？」

西「伍長です！ 第23師団歩兵第64連隊所属！」

鼻で笑う河嶋。

河嶋「俺は曹長だ。学徒兵のクセに伍長止まり……。お前、今なんて言った？」

西「伍長です」

河嶋「第23師団。尚武か？」

西「はい。本籍は生まれの熊本でしたので、23師団に」

河嶋「ルソン島」

西「そうです。よくご存じで」

河嶋「……」

西「もしかしてあなたも」

黙って去っていく河嶋。

西「……」

安齋が戻ってくる。

安齋「西」

笑顔で新聞を見せる。

西「ん？」

安斎「楽しい仕事の時間だ」

○同

西、安斎ほか、調査員たちが机で新聞の文章を文節ごとに線を入れていく。

「経済集中排除を緩和」と言う文章には、「経済／集中／排除を／緩和」。

「消息筋が十三日言明したところによれば、アメリカ国務省および……」には、「消息筋が／十三日／言明／した／ところに／よれば、／アメリカ／国務省／および……」。

新聞名、日時、号数、広告にいたるまで、紙面全ての文章に線を入れている。

西が必死に作業をしている背後から、

田尻清二（34）が顔を突っ込む。

田尻「西くんだっけ？」

西「ひっ！ はい！」

田尻「『協力する』は『協力』と『する』で分けてくれないかな？」

西「りよ、了解しました！」

田尻「それと『アメリカ国防省』は『アメリカ』『国防省』で分けて欲しいな」

西「『アメリカ国防省』で一つの単語かと思いませんが」

田尻「僕はそんなこと言ってないけど」

西「申し訳ございません！ 自分、専門は英語だったもので。英語だったら楽ですよ。英語だ。単語ごとに空白ありますし」

田尻「西くん。僕たちは日本語の調査をしようとしてるんだよ」

笑顔の田尻。

西「申し訳ございません！」

田尻「日本語には、ひらがな、カタカナ、漢字と、一つの言語の中に三種類の文字がある。だろ？ ひらがな、カタカナがそれぞれ46音。実際には濁点半濁点があるからもっと多くて、漢字に至っては二年前に制定さ

れた当用漢字が1850字。でも実際にはもつとたくさんの漢字が使われてるよね。そんな日本語を僕たちは小さいときから膨大な時間をかけて学んできて。君は英語ができるようだけど、日本語を習得するまでにかかる時間というのは、他の言語とは比較にならないほど多くてね。しかも全ての漢字を書ける者は、ほとんどいない。世界中見ても異常な言語であってね……」

ひきつる西の表情。

○同・中庭

西が仰向けになっっている。

安齋がやってくる。

安齋「西。やっぱり研究職の方がお前に合ってるだろ？ 体で汗かくより頭で汗かいた方が疲れるがすつきりするし」

西「やっぱり・研究職の・方が・お前に・合ってる・だろ？ 体で・汗かく・より・頭で・汗かいた・方が・疲れるが・すつきり・するし」

安齋「文節で・切るな。俺も・頭の・中・おかしく・なりそうだし」

ため息を漏らす西。

西「日本語って大変な言語だったんだな」  
安齋「だな。ドイツ語なら単語ごとに空白があって楽なもの」

西「それ、助手の田尻先生の前で言ってみろ。

怒濤の日本語教育を受けられるぞ」

安齋「それは勘弁。あの人、ここだけの話な、戦争中は参謀本部にいたとか」

西「ホントか？」

安齋「そういう賭けを副手みんなですててな。

西もやるか？」

西「やらねえよ」

安齋「ちなみに一番人気は憲兵だ」

西「なあ。最初部屋に入ったとき俺に話しかけてきた人、知ってるか？」

安齋「河嶋さんか。大学と軍での階級聞かれただろ？ 階級が下なら偉そうにしやがっ

西「俺と同じルソン島にいたかもしれない」  
安齋「西。ここでお前は戦争の話をするなよ。」  
特にアメリカ本土に連れていかれた」  
西「捕虜は未だに恥なんだな」  
安齋「もっとたちが悪い。お前は日本兵では珍しく英語ができたから、わざわざルソンからアメリカ本土に連れて行かれたんだ。その目的くらい分かるだろ？」  
西「情報を聞き出すためだ」  
安齋「聞かれたのか？」  
西「情報もへったくれもあるか！ 武器弾薬兵糧、援軍もなし。この地を死守せよとだけ命じられて！ 人をスパイ扱いか？」  
安齋「西。悪かった。でも落ち着け」  
熱を帯びていく西。  
西「ただ死ぬためだけにあんな地獄へ送られて！ 何があつたか教えてやろうか！」  
安齋が西の肩を押さえる。  
安齋「西！ 俺が悪かった！ 悪かった！ でも、落ち着いてくれ！ 深呼吸だ」  
西「……。たまに自分が分からなくなる時があるんだ。俺はこんなことが一生続くのか」  
安齋「しばらく徹夜になるかもしれないから、本当に疲れたときは俺に言ってくれよ。西の分は俺が片付けるから」  
西「すまない」  
安齋「謝るなよ」  
西「安齋こそ。肺浸潤は治ったのか？」  
安齋「肺浸潤？」  
西「肺浸潤と骨肉腫の合わせ技で徴兵を弾かされたんじやねえか、お前。平気なのか？」  
安齋「あ、ああ！ どうにかどうか！ 戦争終わって、良い医者に診てもらったし、生きるだけなら問題ねえ」  
西「そうか。良かったな」  
安齋「ああ」  
安齋の表情はうかない。

○西家・玄関（夜）

西「はあ……。ん？」  
玄関に婦人靴がある。

○同・お茶の間（夜）

洋子「ご飯を食べている。」

西「は、全然と立ち尽くしている。」

洋子「あっ、達治さん。おかえりなさい」

西「洋子さん。何をされているのですか？」

洋子「お先にお夕飯を。今はちようどめざし

をいただいております」

西「お先に・お夕飯を・今は・ちようど・めざ

しを・いただいで・おりました」

洋子「はい」

西「……。わっ！」

千代「西を引っ張る。」

○同・台所（夜）

西と千代がいる。

千代「洋子ちゃん、しばらくうちに置くこと

にしたから」

西「急すぎますって！ いきなり」

千代「5日も帰って来ないで何が急すぎるよ。

3日前からうちにいたわよ。たまたま近所

で会って」

西「でもどうして？」

千代「あんた絶対に洋子ちゃんに手を出すん

じゃないよ」

西「そんなことするわけないですから！」

千代「何かあったら私は死んでご両親の元に

謝りにいかないといけませんだから！」

西「ですから出しませんから！」

千代「そっ。とにかく頼むわよ」

去っていく千代。

西、頭を搔く。

○同・西の部屋（夜）

西が入ってくる。

洋子「中にいる。」

西「おわっ！」

洋子は「For Whom the Bell Tolls.」のペーパーバックをめぐっている。

洋子「あっ。勝手にごめんなさい」  
西「それ、アメリカでもらったんです。収容所にいたとき、僕が日本でアメリカ文学の研究していたと話したら一人の米兵が」

洋子「日本人でアメリカ文学研究してて、英語も話せる人は珍しいですからね」

西「貸しましょうか？ 昔みたいにまた」

洋子、ペーパーバックを置く。

洋子「英語は読めないの」

西「あ……。」「めんなさい。今、日本語の小説は一冊もなく。戦争中に近所の人たちに持って行かれたみたいで。帰ってきてからは何も読む気がしなくて……」

洋子「ねえ。私が達治さんから始めて借りた本って覚えてます？」

西「始めて借りた本……。確か巖谷小波です。洋子さんが組の男子を5人、倒したときですよね」

洋子「5人ではなく3人です。あれは向こうが悪いのです。私が読んでたら、女のクセに盗ろうとしたので。なんで女が本を読むことが悪いのでしょうか？」

西、苦笑い。

洋子「でも私、借りたんではなくて、達治さんのカバンから勝手に持って行ったのですけどね」

西「いえ。あれは僕が貸したんです」

洋子「大人たちはそう思ってくれませんでしたね。この家までお父さんとお母さんがすぐ謝りに行って」

西「そこでも僕話したじゃないですか。僕が貸したんだって」

洋子「覚えてますよ。それで達治さんのお父さんが、それならお前がケンカしろ！ 女の子に何をさせてるんだ！ っ、達治さんが怒られました」

西「お恥ずかしい限りで……」

洋子「達治さん、ケンカもできなければ虫も

殺せない人ですからね」

西「……」

微笑む洋子。

洋子「でも、どうして本を私に貸したなんて  
ウソをついたのですか？　うちにはたくさ  
ん本を買う余裕はなかったもので、つい私が  
達治さんの本を勝手に持って行ったことが  
本当のことでしたのに」

西「それは……」

洋子「……」

西「もう夜遅いので、寝ましょう」

洋子「はい」

西「……。洋子さん、ここで？」

洋子「はい」

西「えっと……」

千代が後ろから西の肩を掴む。

○同・庭

西が布団を抱えている。

千代が物置を開ける。

西「さすがに……」

千代「洋子ちゃんを怖がらせるんじゃないよ。  
あんた夜な夜な飛び起きて叫ぶでしょ？」

西「……」

千代「あんたが出征してから、私があの子の  
ご両親にお米を分けてもらったり、どれだ  
けお世話になったことか。なのにお二人と  
も。お兄さんまで」

西「……」

千代「旦那はまだ戻って来てないって聞くし、  
あの子が何をしたらって言うんだい」

西「旦那？　結婚してるんですか？　洋子さ  
ん」

千代「あんなべっぴんさん、放っておく男が  
どこにいるんだい？」

西「……」

千代、小声で。

千代「夫の家族から逃げてきたらしいのよ」

西「何かあったのですか？」

千代「そんなの聞くことじゃないから聞いて

ないわよ。でも、戦争帰りの男たちが乱暴になつて、女子供に手を上げることが増え  
てるらしいから」

西「……」  
千代「明日も仕事でしょ？ 早く寝なさい」  
家に戻つていく千代。  
呆然と立ち尽くす西。

○文部省教育研究所・調査委員会室

西、安齋ら調査員たちが、言葉が書かれた単語カードを仕分けしている。  
西が「見える」と書かれたカードを手に悩んでいる。

西「……」  
西、「見える」を「見る」と書かれたカードの山に詰む。

田尻の手が西の手を掴む。

西「ひい！」  
田尻「『見える』は『見る』と別にしてほしいな。『富士山を見る』と『富士山が見える』だと、意味が違うだろ？」

西「lookとseeの違いと一緒にすね」

田尻「僕は日本語の話をしてるんだけどな」

西「すみません！」  
田尻「『着る』と『着せる』も別にしてほしいな」

西「了解しました！」  
笑顔を残して去っていく田尻。  
別の調査員に対して。

田尻「君さ、『東京』は漢字でもカタカナでも一緒だと思わないのかな？」

西、次の単語カードを手取る。  
「結婚」のカード。

西「……」  
西の隣にいる安齋。

安齋「この作業、いつまでやるんだよ」

西「数か月分の新聞分解して、単語カードは6600枚になったと聞いたぞ」

安齋「で、ここから調査の問題に使う単語を選ぶということか」

西「それは統計学の先生が」  
安齋「数字こねくり回して使用頻度を計算して選ぶらしいな。甲乙丙と」  
西「徴兵検査みたいだな」  
安齋「……」  
田尻「田尻がまた後ろにいる。」  
田尻「そのうち日本語自体が丙種になるかもしれないけど」  
西・安齋「ひい！」  
田尻「今回の日本人の読み書き調査。表向きは国語の改良とこれからの教育のためなんと言ってるけど、本当は違う」  
西「……」  
田尻「もし調査の結果、テストの成績が悪くて日本人の日本語能力が低いと判断されたら、日本語は消滅する」  
西「日本語消滅？」  
田尻「G H Qが日本語が難しいことを口実に日本語を廃止してローマ字表記にしたり、いつそのこと英語にしたがってるとか」  
安齋「戦争に負けたからと、我々日本人は言葉まで奪われるのですか？」  
田尻「その我々日本人だってやっただろ。占領した国で日本語教育を」  
西・安齋「……」  
田尻「もし調査の結果が悪かったら、来年の桜が咲く時期には、西くん。君の名前はチャーリー・イーストだな」  
西「……。はい」  
笑顔を残して去っていく田尻。  
安齋「イーストって東だよな」  
西「ああ」  
西たちのやりとりを河嶋が見ている。

#### ○ 撞球場

西と安齋が玉突きをしている。  
安齋が狙いを定めている。  
右手では狙いづらい位置に手球があるため、安齋の体勢はなんだかおかしい。  
手球を撞く安齋。

安齋「あ、クソオー」  
手球は狙いから大きく外れる。

同じく右手では狙いづらい位置の手玉を西がキューを左手に持ち替えて撞く。球は軽々とポケットに沈まる。

安齋「俺が下手なんじゃない。お前がうまいんだ。それにこの左腕がもう少し動けば、俺だって逆手で撞けたはずで……」

次の狙いを定める西。

安齋「なあ、西。さっきの田尻先生の話。本当だと思うか？ この調査の成績が悪かったら日本語がなくなるって」

西、難なく次の球をポケットに沈める。

西「俺は別になくなったらなくなったらで構わないけどな。変わるならどうせ英語だろうし」

安齋「お前は英語ができるからいいだろうけど、新聞にメニュー表、看板まで。日本人のほとんどが路頭に迷うぞ」

西、最後の9番ボールに狙いを定める。手球を撞く西。

狙いは外れて手球がポケットに沈む。

西「……」

安齋「よしっ！」

西「俺は英語が話せたからここにいる。言葉が通じなければ殺された。言葉が違うから戦争なんか起きるんだ」

安齋「言葉が一緒でも戦争は起きてるだろ。」

アメリカ南北戦争とか」

安齋、絶好の位置に手球を置いて、9番ボールを狙う。

安齋「もらった！」

手球を撞く安齋。

9番ボールは弾かれるも、ポケットに沈まない。

安齋「うう……」

天を仰ぐ安齋。

河嶋が入ってくる。

安齋「あ、どうも」

西は軽く会釈。

河嶋「お前らもやるんだな」  
安斎「俺ら大学の撞球倶楽部でしたので」

河嶋が手球を撞く。  
鋭いショットで9番ボールを沈める。  
呆然とする安斎。

河嶋「次、やるぞ」  
西「……」

× × ×

河嶋がブレイクショットを打つ。  
勢いよくはじける球。  
だがポケットには一個も入らない。

河嶋「クソッ。おい」

安斎「西、先やってくれ」  
西「……」

西が1番ボールを狙って手球を撞く。  
ポケットをかすめるが球は落ちない。  
安斎、続けて1番ボールを狙うも、大きく外れる。

安斎「あれ？」

河嶋、1番、続けて2番ボールを難なく沈める。

安斎「あいつ、やるな……」  
西「……」

河嶋「なあ、俺が勝ったらお前ら二人、調査員辞めるってどうだ？」

安斎「ふ、ふざけたこと言ってんじゃねえ！お前が勝手に決めるな！」

河嶋「日本語がなくなっても良いとか。そんな人間がなぜ調査委員会にいる？ 西、お前スパイか？」

安斎「盗み聞きとは良い趣味しやがって」

河嶋「お前には聞いてない」

安斎「なっ！」  
河嶋、3番ボールを狙うも沈められない。

河嶋「クソが」

西、3番ボールに狙いを定める。

河嶋「お前、ルソンからどうやって日本に戻って来た？」

西「……」

河嶋「ルソン島で捕虜になった一部がアメリカ本土に連れて行かれた話を聞いたことがあつてな」

安斎「相手が撞くときはしゃべるな」

河嶋「失礼」

西「3番ボールを外す。」

安斎「よしっ。仇は討つ」

安斎「3番ボールを外す。」

河嶋「うう……」

河嶋「情報を探い定める。」

河嶋「情報を探い出すために連れて行かれたのは将官が多かったが、極まれにいた英語が話せるヤツも連れて行かれて、通訳と世話係をさせられていたとか」

西「……」

河嶋「一撞きで3番と4番ボールを沈める。」

安斎「なっ！」

河嶋「河嶋、続けて5番ボールを沈める。」

河嶋「ルソンの収容所より、アメリカ本土じや良い生活してたんだろ？」

河嶋「6番ボールを外す。」

西「6番ボールに狙いを定めるも他の球が邪魔で狙いが定まらない。」

河嶋「お前、正面から狙うとかバカか？ 地雷抱えて戦車に突っ込むのと一緒だろ」

安斎「戦争の話はやめろ。誰にも思い出したくないことあるだろ」

河嶋「戦地に行っていないヤツが偉そうに言うな」

安斎「……」

西「キックショット狙いに変更して手球を撞くが外れる。」

河嶋「トーシロか」

安斎「当然のように6番ボールを外す。」

安斎「ああ！ クソっ！」

河嶋「6番続けて7番と沈めていく。」

西「安斎は見ている事しかできない。」

河嶋「8番ボールを狙う。」

安斎「外せ外せ外せ……」  
手球を撞く河嶋。  
安斎「ああ！」  
8番ボールがポケットに沈む。  
河嶋「外せ外せ外せ外せ外せ外せ……」  
「外すかよ。こぼがだれが」  
河嶋が撞こうとした瞬間、外から衝突音が響く。  
安斎「なんだ？」  
窓の外を見ると乗用車が電柱にぶつかっている。  
安斎「ああ。やつちまったな。ありや」  
西と河嶋が頭を抱えて床に伏せている。  
安斎「へっ？」  
西「……」  
河嶋「……」  
安斎「西、大丈夫か？」  
西「ああ。悪い」  
立ち上がる西。  
河嶋も立ち上がると、大きく深呼吸して再び9番ボールを狙う。  
が、その手はかすかに震えている。  
河嶋が手球を撞く。  
9番ボールは弾かれるも、ポケットに沈まない。  
安斎「よしやああ！」  
河嶋「……。こぼがだれが」  
安斎「西、これで終わりにしろ！」  
狙いを定める西。  
手球から9番ボール、そしてポケットまでは一直線である。  
西「……」  
西の手が震えている。  
安斎「西、頼む！」  
安斎「あれ？」  
西「悪い」  
河嶋「……」  
安斎「お、俺の番か……」

安齋、キューを構えるも、右手では狙いづらい位置に手球がある。

安齋「……」

西「安齋。俺は自分だけが生き残れた理由は分かってるが、自分だけが生き残れた意味が分からないんだ」

安齋「……」

西「この仕事だって、ある人に見栄を張って受けちまっただけで、自分がやる意味があるのか分かってなくて。それに俺は日本が嫌いなのもかもしれない。ひどい目にあわされたうえに、アメリカかって巨国家をこの目で見ちまったし。だから無理して日本語のために働くってことが」

安齋「グダグダうるせえ！俺にはお前だけ

西「……」

安齋「俺はお前のためだったら何でもしてやる。この球を外しても、また何度でも仕事を紹介してやる。戦争神経症だって治るまですつと面倒を見てやる。じゃないと俺が生かされた意味がなくなるだろ！」

安齋、体勢を変えて左手でキューを握る。

西「……」

安齋、力強く手球を撞く。

9番ボールをかすめる手球。

力なく転がっていく9番ボール。

かろうじてポケットに沈む。

安齋「よっしゃあああ！それじゃ河嶋さん。

河嶋「俺はそんな約束してない！」

河嶋「俺が勝ったらお前らが辞めるとは言ったが、お前らが勝ったら俺が辞めるとは一言も言ってない。約束してないことができないか！」

安齋「なにを！」

河嶋「お前らみたいなトーシロと玉突きできるか！」

安齋「なにを！」

河嶋「お前らみたいなトーシロと玉突きできるか！」

安齋「塩だ！塩！振りまくれ、西！」  
西がキューの握られた安齋の左手を掴む。

西「安齋、お前病気つてのはウソか？」

安齋「……」

西「骨肉腫なんてやってないだろ」

安齋「……」

西「まさかと思うが肺浸潤もか？」

安齋「西。まず聞けつて……」

西「答えろ！安齋！」

安齋「親父だ！親父が！俺が三兄弟の三男坊だつて事は知ってるだろ？一番上の兄貴は長男だから徴兵されないとして、二番目の兄貴は徴兵されて。それで俺はまだ学生だったから徴兵はないと思つてたら、学徒出陣のウワサが。それに一番上の兄貴が自分も行くと言つて聞かなくて。だから親父が家を守るために俺を！親父は田舎では力があつたから！でもな、二人の兄貴は死なずに戻つて来て！俺はお役ごめんで家から追い出されて！」

西「長々と。言い訳を」

安齋「俺だつて生きてきた心地はしなかつた！田舎じゃみんな分かつてたから、戦場に行くことがないじいばあ、子供にまで石を投げられて！お前に分かるか！」

西「俺に仕事を紹介したのは罪滅ぼしのつもりか？」

安齋「……」

西が安齋を殴る。  
床に倒れる安齋。

安齋「西……」

西「生きてるからつてどうなる？俺にこびりついた悲鳴と血は消えねえ。叫びながら目が覚めることもなくならねえ」

安齋「……」

西「俺だけじゃないか。お前も、一生呪われ続けるんだな」  
泣き崩れる安齋。

西、安齋を見て立ち尽くす。

○桜並木の道（夕）

桜はすっかり葉桜になっている。

西が歩いている。

安齋を殴った右手の拳は腫れている。

洋子が桜の木を見上げている。

西「洋子さん？」

洋子「あら。おかえりなさい。今日は泊まりじ

やないんですね」

西「言葉集めが終わって、どの言葉を調査に

使うかをお偉い先生たちが決めているので、

僕たち下っ端は帰ってもいいと」

洋子「その手、どうされたんですか？」

西「これはそのお……、階段で転んでやって

しまいました」

洋子「そうですね。達治さんが人殴るとか

ないでしょうし」

微笑む洋子。

西「……」

洋子「出征前、最後にお会いしたのもここで

したよね。達治さん、散々酔っぱらって帰

ってきて」

西「あのときは……」

洋子「兄が死んだ知らせが来た直後でしたの

で、私、達治さんにひどいことを言っ

まして。ごめんなさい」

西「……」

洋子「私の夫も学生で、達治さんの半年くら

い後に。私、結婚したことお伝えしており

ましたっけ？」

西「母から聞いています」

洋子「そうですね。お父さんの知り合いの知

り合いの息子さんで、慌てて嫁探ししたた

みたいでして。ワケも分からないまま祝言

上げて、そのまま出征されて」

西「……」

洋子「私にはもったいないくらい良い人です

た」

西「まだ戻ってこられてないんですよね？」

洋子「千代さんって相変わらずおしゃべりですわね」

西「きつと戻って来ますよ。僕も死んだことにされていましたし」

洋子「うん」

西「帰らないのですか？」

洋子「もう少しだけ」

西「……」

洋子「子供が生まれてね、もし女の子だったら『さくら』って名前にしようって、あの人と約束してたんです」

西「さくら？」

洋子「うん。ひらがなでさくら」

西「……」

洋子「洋子、自分のお腹に触れながら。」

洋子「ここまで来てくれたんだけど、あんな世界に生まれるのはきつと嫌だったんだよね。ごめんね」

うつむく洋子。

西「洋子を支えようとするが、差し出した右手が腫れていることに気がつく。」

洋子「もう少しだけ。もう少しだけここにいさせてください」

西「手を引いて去っていく。後ろの洋子が気になるが、振り返ることができない。」

### ○文部省教育研究所・調査委員会室

西が部屋に入ってくる。

室内を見渡すが安斎はいない。

河嶋が西を一瞥する。

西「……」

田尻がやってくる。

田尻「西くん。お偉い方が今さらああだこうだ言ってきてね、これ調べ直してくれないかな？」

田尻が「ことに」と書かれた単語カードを数枚渡す。

西「はい」

首を傾げる西。  
田尻が手元の紙に「事に」「殊に」と書く。

田尻「どっちの意味だと思う？」

西「前後の文章がないと分かりません」

田尻「だから調べ直して欲しくて」

西「分かりました。ちなみにどの新聞でしょうか？」

西「日にも分からないのですか？」

西「……」  
笑顔の田尻。

○同・資料室

西が入ってくる。

中には膨大な新聞資料が山積みされている。

ため息をつく西。

新聞の崩れる音がする。

西「思わず耳を塞いでしゃがむ。

安斎の声「た、助けて……」

恐る恐る声の方をのぞき込む。

安斎が棚から落ちた新聞に埋もれている。

西「安斎！」

慌てて駆け寄り、安斎を引っ張り出す。

安斎「西？」

西「安斎！ おい！」

安斎が「くわえる」と書かれた単語カードを見せる。

西も「ことに」カードを見せる。

西・安斎「日本語、面倒くせえ！」  
思わず笑い合う二人。

× × ×

西と安斎が新聞を漁っている。

西「あった！ あったぞ『くわえる』！」

安斎「よくやった！」

西「『米国と英国にくわえ』。additionの意味だ。猫が魚を啜える方じゃなくて」

安斎「よっしゃ！ 次！」

西「次は『ことに』見つける！」

安斎「Verstehen。」

再び新聞を漁る二人。

西「安斎。俺たち学生に徴兵免除がなくなつたと聞かされた日、みんなで朝まで飲み明かしたことを覚えているか？」

安斎「忘れるわけないだろ。何話したかまでは酒で覚えてねえが」

西「その帰りにな。家の近くで近所の幼なじみとばったり会ったんだ。その子、兄貴の戦死の知らせが来たばかりで、学生は将来偉くなるから遊んでも良いのかとか、庶民をバカにしてるのかとか散々言われて」

安斎「その通りだろ。俺たちは授業も出ずに銀座で遊びほうけていて。恨まれるに決まってる」

西「詫びにお互い腹でも切るか？」

安斎「冗談じゃない！俺は俺を見捨てた家に復讐してやるまで死ぬるか！」

西「それこそ安斎だな。腹切ったら中は真っ黒だろ」

安斎「ドイツ文学者として成り上がって名声も金も手に入れて、運転手付きの高級車で田舎に乗り付けてやる！」

西「そうか」

安斎「ここ、笑うところだぞ」

西「羨ましいと思つてな。安斎にはやりたいことがあつて」

安斎「変なことというな！背中に発疹ができるだろ」

西「俺は兵隊じゃクソの役にも立たなかつた。帰つて来てからも何もできず、ただ死んでないだけで。この仕事も自分が誰かの役に立てるのかなんて分からねえ」

安斎「何か忠告の一つでもしてやりてえが、それは俺にもわからん。悪いが自分で探せ」

西「そうだな」

安斎「とつと『ことに』探して戻るぞ」

西「ああ」

西、浮かない表情。

○同・調査委員会室

西と安齋が入ってくる。

安齋「田尻先生、調べ終わりました」

西と安齋、メモを書いた単語カードを田尻に渡す。

田尻「うん。これ追加でお願い」

「すすめる」と書かれたカードを安齋に渡す。

西・安齋「うう……」

田尻「西くんはこっち手伝って」

西「はい！」

意気揚々と田尻の元へ。

安齋は肩を落としながら部屋を出る。

田尻が西に原稿を渡す。

田尻「問題の草稿案が来ててね。最初の書き取り問題。受験者の気持ちで聞きたいから、読んでくれないかな」

西「頭から読めばよろしいでしょうか？」

田尻「後ろから読むことがあるのかな？」

西「すみません……。『いいですか、ではこれからわたくしが書き取ってもらうことばを、ひとつひとついいますから』」

田尻「そこは前口上だから飛ばして」

西「はい。『1。ひとつ目。ひらがなで「きく」と書いてください。秋に咲く花の「きく」です』」

西、田尻を伺う。

田尻「続けて」

西「『ふたつ目。ひらがなで「たどん」。火鉢やコンロに……。田尻先生。菊の花は秋に咲くのでしょうか？』」

田尻「君はモノを知らないようだね」

西「すみません！ えっと『ひらがなで「たどん」。火鉢やコンロに使う「たどん」です』」

田尻「西くん」

西「はい！」

田尻「この調査は日本全国で同じ問題を扱う。人によって感覚の異なる言葉ではないけない。『きく』はおかしいと上には具申する」

西「では『さくら』はどうでしょう？ 春に咲く花の『さくら』なら、日本人なら間違えるはずがありません」

田尻「……」

西「田尻先生？」

田尻「悪くないですね。西くん。良く言いました。『さくら』で先生方に提案してみましよう」

西「ありがとうございます！」

西、思わず笑みがこぼれる。

### ○小菅刑務所・集会室

T「1948年5月 予備テスト」

西が緊張の様子で壇上に立っている。目の前には、強面の囚人の男たちが座っている。

首筋や腕に入れ墨が見える男もいる。

西「で、ではいいですか？ これからわたしが書き取ってもらうことばを、ひとつひとつついでに聞いてもらいますから、よく耳をすまして聞いてください……」

### ○文部省教育研究所・調査委員会室

西がぐったりと座っている。

安斎は隣でほくほく顔。

西「予備テストだからって、刑務所でやることないだろ」

安斎「小学校は良かったぞ。俺なんだか子供欲しくなってきた。西、いい人いないか？」

西「うちのお袋で良いか？」

安斎「そうだな。考えておく」

西「やめるバカ！」

笑う安斎。

河嶋が田尻に詰め寄っている。

河嶋「やはり今回の予備テストの問題では庶民には難しすぎます。最後の文章問題などはもっと簡潔な文章にすべきです。なんですかこの職業安定所の問題文は？ 文章をこねくる回し過ぎです。使用する漢字も、児童が分かるものにすべきです」

田尻「なるほど。もういいかな？」

河嶋「調査対象者はもつと厳選すべきです。少なくとも高等教育を受けている成人男子のみに。対象が15歳から65歳の男女というのは、あまりにも広すぎます！」

田尻「河嶋くんは最初に聞かなかつたかな？これは試験じゃなくて調査だつて。日本人がどれほど日本語を理解して使ってるか、正しく調べることが目的で」

河嶋「調査の成績が悪ければ日本語が廃止されてしまうんですよ！」

田尻「それはごもつともだけどねえ……」

河嶋「G H Qに日本語廃止の口実を一寸たりとも与えてはなりません！」

田尻「うーん……」

二人のやりとりを見ていた西と安齋。

安齋「最近、河嶋ますますひどいな。また玉突きで黙らせるか？」

西「……」

○西家・廊下（夜）

西が歩いている。

その装いはすっかり初夏である。

風呂場から洋子の鼻歌が聞こえる。

西「……」

千代が後ろから西を掴む。

西「ひい！」

○同・台所（夜）

千代が西を引っ張って入ってくる。

西「な、何もしてませんよ！何もしようともしません！」

千代「達治。あんたあの子が何してるか、知ってる？」

西「何かとはなんででしょうか？」

千代「いつもあんたが朝出て行った後に、あの子もうちを出て行くんだけど、夕方には帰って来て」

西「仕事だと思えますけど」

千代「それくらい分かるわよ！」

千代、西を叩く。

西「いつ！」

千代「昔の知り合いに紹介してもらったっていう商店で働いてるみたいだけど、その店が休みの日にも出かけていくのよ」

西「はあ……」

千代「お友達と映画見るとか言ってる」

西「では映画だと思えますが」

千代、西を叩く。

西「いつ！」

千代「うちに居候してもう2ヶ月よ。何かおかしいと思わない？ 働いてるのに、一銭もうちにお金入れてくれないし」

西「洋子さんからお金取るんですか？」

千代「ごはんも水もタダじゃないのよ！」

千代、西を叩く。

西「いつ！ じゃあなんですか？ 洋子さん、

追い出すつもりなんですか？」

千代「そうは言っていないでしょ」

西「夫の家から逃げて来たって言うのに、無理やり戻ってもらうのは」

千代「それも今となっては本当の話かしら」

西「……」

○同・玄関（朝）

洋子が玄関を出て行く。

洋子「行って参ります」

千代の声「午後は夕立になるみたいだから、気をつけなさい」

洋子「はい」

玄関を閉める洋子。

西と千代が奥から顔を覗かせる。

千代「早く行きなさい」

西「尾行なんてしてたら仕事に遅れます」

千代「遅刻なんて適当に言い訳すればいいのよ！ ほら！」

西、千代に押し出される。

○同・表（朝）

西が家の前の道をのぞき込む。

洋子の後ろ姿を確認する。  
振り返ると家の中から、千代が早く行  
けと手振りをしている。  
西、こっそり洋子についていく。

○路上（朝）

西が洋子の後ろをついていく。

○駅・改札（朝）

洋子が切符を買っている。  
西は少し離れたところで見ている。  
洋子、改札内へ入っていく。  
西も続けて内へ入る。

○同・ホーム（朝）

乗客で混み合っている。  
西、洋子の人混みで見失う。  
電車の発車ベルが鳴る。  
西、慌てて電車に乗ろうとするが間に  
合わない。  
電車がホームを離れていく。

西「……」

ベンチに座ると隣に洋子がいる。

西「わっ！」

洋子「わっ！ 達治さん。驚かせないでくだ  
さい」

西「すみません……。洋子さん。今日はお仕事  
はお休みで？」

洋子「はい。ですから、映画でもと思いまし  
て」

西「ご友人とですか？」

洋子「殿方と思ってるのですか？」

西「いえ！ そんなことは！」

笑顔を見せる洋子。

洋子「あの人に言えないことなど、決してし  
ませんので」

西「……」

洋子「達治さん。日本語調査の方はいかがで  
すか？ 本番は来月でしたよね？」

西「はい。先週から本番に向けて、調査員の指

導が始まっていました。口で言った言葉を  
書き取る試験もあるので」

洋子「なんだか楽しそうですね。私、受けてみ  
たいです」

西「調査対象者はくじ引きで決まりますので、  
運が良ければ」

洋子「残念。私、運はないのでムリですね」

西「祈りましょう！ 洋子さんにくじが当た  
るように！」

笑う洋子。

洋子「ねえ達治さん。一問目だけ、こっそり教  
えてくれませんか？」

西「一問目？ 一問目はひらがなで……。ダ  
メです！ 当日まで機密扱いですから！」

洋子「ケチ。終わったら教えてくださいね」

西「それは大丈夫ですけど……」

微笑む洋子。

西「洋子さん、旦那さんの家の方にはまだ帰  
らないんですか？」

洋子「何ですか？ 私を追い出すつもりなの  
ですか？」

西「そういうワケじゃなくて！」

洋子「私のこと、嫌いですか？」

西「とんでもないです！」

洋子「嫌いじゃない。じゃあどうい  
うこと  
しょうか？」

洋子、西を見つめる。

西「……。旦那さん、早く帰ってこられるとい  
いますね」

洋子「達治さんが悪いのですからね」

西「はい？」

洋子、立ち上がって。

洋子「お財布。忘れたことを思い出しました。

私、戻りますね」

西「あれ？ さつき切符を買われたのでは」

足早に消える洋子。

西、追うことができず呆然とする。

○文部省教育研究所・調査委員会室

西が駆け込んでくる。

西「申し訳ございません！ 考え事をしてましたら大崎まで乗り過ごして……」

中には誰もいない。

思わず安堵する西。

安齋が慌てて入ってくる。

安齋「田尻先生！ つてなんで西なんだよ！」

西「考え事してたら大崎まで乗り過ごして」

安齋「そんなのどうでもいいんだよ！ それどころじゃねえんだ！」

西「何があつた？」

河嶋の怒号が聞こえてくる。

河嶋の声「貴様！ そのような体たらくで許

されるとでも思ってるのか！」

安齋「なっ？」

西「……」

西「……」

### ○同・研修室

西と安齋が入ってくる。

河嶋が佐々木一郎（20）に恫喝して

いる。

河嶋「貴様みたいな田舎者が国家の行く末を

決めるこの大調査に関わることが許される

かと思ってるのか！ 恥を知れ！」

縮こまつて動けない佐々木。

河嶋、佐々木をぶん殴る。

西「河嶋さん！」

河嶋「こいつがいけない！ 自分の身をわき

まえず、本番の調査員に応募などしてきや

がつて！」

西「日本語学科の学生ですよ。優秀な学生に

間違ひありません！」

河嶋「紙の上ではな！」

西「紙の上？」

強い盛岡弁で話す佐々木。

佐々木「許してぐだせえ！ 4月さ東京さ出

でぎだばがりで。でもけっぱりますから！」

西「はい？」

河嶋「なまりがあるヤツが、聞き取り調査の

問題なんてできるか！」

西「今から鍛練を積み本番には」

河嶋「間に合うわけねえだろ！ 田舎の人間がなまり抜けるまでどれほど掛かると思ってる！ こばがだれが！」

河嶋が佐々木を蹴つ飛ばす。

西「河嶋さん！」

床に転がる佐々木。

その先に田尻がいる。

西「田尻先生！」

田尻「そんなに驚かなくても。人を妖怪みたいに」

田尻、足元の佐々木を見て。

田尻「君。悪いけど帰ってくれないか。君の仕事はここにはない」

佐々木「んだども、けつぱりますから！」

田尻「できないことをやりますと言わせて、多くの犠牲を強いてきたのがこないだの戦争だ。君は死にたいのか？」

佐々木「でも戦争は終わった」

田尻「終わってないですよ。今度は命や家ではなく言葉を奪いに来たのです。言葉が失われるということ、先人が残した書物が読めなくなってしまうことです。そうなる戦争で傷ついた者たちの痛み、悲しみ、無念を将来に伝える手段もなくなり、みんな忘れられてしまう。それだけは必ず避けなくてはなりません」

佐々木「……」

田尻「分かったかな？」

田尻、佐々木に笑顔を向ける。

佐々木、田尻に一礼すると出て行く。

田尻「西くん。今の子の代わりは君がやってくださいいね」

西「はい。えっ？」

去ろうとする田尻。

河嶋「待て！ 貴様には前から聞きたかったことがある」

田尻「はて。何でしょうか？」

河嶋「貴様、参謀本部にいたんだとな！ その落とし前は付けたのか！」

田尻「……」

河嶋「弾も飛んでこない部屋で卓上に駒を並べて、のうのうと生きやがって！ 弾も銃も食料も寄越さずウジ虫に食われながら死んでいった人間を考えたことはあるか？」

田尻「河嶋くんは、日本が戦争に負けた理由を考えたことはあるか？」

河嶋「俺の質問に答えろ！」

田尻「西くんはどう思う？」

西「えっと……。圧倒的に国力の差が違いすぎました。僕、アメリカ本土に連れて行かれて、ゴールデンゲートブリッジを見たときはこんな連中と戦っていたのかと絶望して。収容所で映画“Gone With the Wind”を観させられたときも」

田尻「なるほど。僕はね、高等教育を受けた僕たちのような人間のおごりのせいだと思つててね」

西・安斎・河嶋「……」

田尻「そのおごりが一市民たちを下に見て駒として扱い、無謀な作戦で数え切れないほどの犠牲を強いて」

河嶋「その一角をなしていたのが貴様のいた参謀本部だろ」

田尻「河嶋くんは僕が参謀本部にいたと賭けていたのですか？ 残念だから君は負けだ」

河嶋「なに？」

田尻「僕は戦争中、海岸に穴を掘って、敵が上陸してきたら地雷を抱えて突っ込む訓練を永遠とやっています。いや、やらせていました。敵が海から攻めてこなかったのです。部下に必死の攻撃を命じることがなかったのですが、想像して僕は今でも夜中に跳び起きます」

河嶋「……」

田尻「君も戦時中、階級は曹長だったそうだな。立場としては、私と一緒にではなかったのかな？」

河嶋「……」

河嶋が足早に部屋を出て行く。

西「河嶋さん？」

安齋「都合悪けりや自分だけ逃げるとは。いかもあれだな」  
田尻「ところで安齋くんは僕が憲兵だと賭けていたようだね」  
安齋「申し訳ございませんでした！」  
田尻「僕の兄弟は皆、憲兵だったから遠からずだね。僕は士官学校を避けるために、言語学の道に無理やり進んだわけだし」  
田尻「とにかくも。いつの日かの上官たちは良いたいに恨まれることないよう、僕たちは良い日本語調査にしましょう」  
西・安齋「はい！」  
笑顔の田尻。  
佐々木「あのお……」  
田尻「しつこいですよ。学生なら帰って勉強に励みなさい」  
佐々木「こばがだれが」  
笑顔になる田尻。  
田尻「僕の日本語研究は蝸牛考から入ってるので、方言には少々詳しくてね。侮辱されちゃ、僕も黙っては……」  
佐々木「いえ！ 先程の方がそう言ってるたごどで」  
西「河嶋さんですか？」  
佐々木「もしかしたら、おらと同じ生まれでや！ ねあ！ がど。おそらぐ盛岡の近く」  
西「安齋、知ってるか？」  
安齋「知らん。本人も何も話さないし」  
西「ルソン……」  
佐々木「んだ！ ルソンさ配属された第8師団は弘前の隊で、うちの連中もそこに。だがるソンから故郷に帰ってきた者はほとんどいねえ。あの人もきつとひでえ目にあつたんだな」  
西「……」

○ 駅前・繁華街（夜）  
大雨が降っている。

傘を差して行き交う人々。  
西が歩いている。  
飲み屋から肉体労働風の若い男二人が、  
河嶋を乱暴に放り出している。  
西「河嶋さん！」  
地面に転がる河嶋。  
だいぶ酒に酔っている。  
若い男1「やっぱり弱えな。大学上がりの坊  
ちゃんつてのは」  
若い男2「頭良くて何にもならねえんだよ。  
大学で習わなかったのか？」  
笑う二人。  
河嶋「こばがだれが……」  
西「河嶋さん、行きましょう」  
若い男1「あんたもあれか？ 学徒兵の仲間  
か？ この曹長さまの」  
西「……」  
若い男2「あいつら兵隊には俺らより遅く入  
ってきたクセに出世は早くてな。始めのう  
ちに、どれほどぶん殴っておくかがミソだ  
ったな」  
若い男1「兵隊じゃ役立たずで、真っ先に死  
んじまったけど」  
笑う二人。  
西「……」  
西が二人の前に立つ。  
若い男1「おうなんだ？ やろうつて……」  
西、有無を言わさず若い男1を殴り倒  
す。  
若い男2「！」  
間髪入れずに若い男2を殴る。  
倒れた若い男2の顔面に何度も何度も  
拳を加える。  
我を忘れたような西。  
河嶋「西！」  
河嶋が西を後ろから掴んで放り投げる。  
怒りで我を忘れている西、男たちに再  
び向かっていく。  
河嶋がその頬を殴る。  
ようやく我に返る西。

若い男二人が目の前に倒れている。  
西、自分の手を見る。  
その両手はひどく腫れている。

○河嶋の下宿・内（夜）

外の雨は続いている。

六畳二間の室内。

部屋の本棚、床はぎつちりと本が重なっている。

西が肩身狭く座り、手ぬぐいで手を冷やしている。

河嶋は一人で酒を呑んでいる。

河嶋「人の殴り方も知らねえクセにでしゃばりやがって。二度とやるな」

西「すみません……」

西、部屋の蔵書を見渡す。

河嶋「志賀直哉なら全部持って行って良いぞ。

あいつ、日本語なくしてフランス語にしろとかほざきやがって」

西「昔の僕の部屋もこうでした。ここまでは多くないですけど。戦争中に全部なくなつてしまいました」

河嶋「そうか……」

西「僕はアメリカ文学ばかりで。オー・ヘンリ、マーガレット・ミッチェル、フィッツジェラルド、ヘミングウェイとか。あとアメリカにいたときに、レイモンド・チャンドラーという新人作家を教えてもらって」

河嶋「全員知らん」

西「翻訳されているのはまだ少ないですけど、基本的には英語の原文で読みました」

河嶋「自慢か？」

西「英語は僕の命を救ってくれたのです。英語が話せなければ、僕はルソン島で。ただ運が良かっただけで」

河嶋「死んだヤツらは運が悪かったと」

西「運で片付けるのは」

河嶋「つまりは、貴様はまだ銀河鉄道に乗れなかつたということだ」

西「銀河鉄道？」

河嶋が本の山の中から、宮澤賢治全集の一冊を西に渡す。

西「宮澤賢治ですか。僕、少し読んだことありますけど、擬音の表現が合わなくて」

河嶋「それはお前が雪国を知らねえからだ。水も空気も吐き出す息も凍てつく冬の朝。雪の上を歩く感触。どんなに着込んでも防げない風の冷たさと強さ。そこに生きる人間の営み。東京育ちの連中には、雪国の暮らしたなんて想像できねえだろ」

西「はい……」

河嶋「西。人間は死んだらどこへ行くか知ってるか？」

西「極楽浄土ですか？」

河嶋「違う」

西「地獄でしょうか？」

河嶋「違う」

西「……靖国？」

河嶋「南十字（サウザンクロス）だ。宇宙を走る汽車に乗って南十字に向かう。その汽車こそが銀河鉄道。何を言われようと俺はそう信じてる」

西「そういう話なんです。『銀河鉄道の夜』は」

河嶋「そう単純じゃねえよ。とにかく読んでみる」

西「分かりました。お借りします」

河嶋「河嶋、西から本を取り上げる。」

河嶋「これは俺の本だ。自分で買え」

西「はあ……」

河嶋「それに『銀河鉄道の夜』はここにねえ。焼かれちまった。入隊したときに持って行ったら、クソみたいな年長兵にたき火に放り込まれて」

西「小説を読まない人たちにとって、本は紙ですからね」

河嶋「だが俺は自分の世界を失ったと感じた。いや世界でも小せえ。宇宙だ。俺は宇宙を失った」

西「……」

河嶋「だから俺は出世してやり返してやった。  
米兵がマシンガンだ戦車だやって来たとき、そいつらに地雷一つ持たせて突撃命令を。何人も何人もだ」

西「……」

河嶋「そいつらが今になって夢に出てきやがるんだ。地雷を持って俺に向かつて。俺は必死に逃げて。なぜか俺は本を持って、必死に守ろうとしている。あともう少し。後もう少しで逃げ切れるって瞬間、目の前に米兵がマシンガンを構えてやがる。そこで俺は殺されて目が覚める」

西「……」

河嶋「報いだなんてことくらい分かってる。だがこれ以上俺から奪うのは違うだろ」

河嶋の目に涙があふれていく。

河嶋「俺の友人も研究も未来も全部奪いやがって！ それで今度は日本語まで奪おうとしやがって！ 日本語がなくなっちゃまった、ここにある物語はどうなる！ 全部忘れられてしまっただろ！ そうなったら俺の全てが！ 宇宙が！ これ以上俺から何も奪うな！ こばがだれが！」

泣きわめく河嶋。

西はただ見つめることしかできない。

○古本屋・店内

西が宮澤賢治全集を見つける。

中に「銀河鉄道の夜」が掲載されていることを確認してレジへ。

古本屋の店員、細見金之助（56）。

細見「まいど」

レジを終えて帰ろうとする西。

洋書が並んでいる一角で足が止まる。

オー・ヘンリ、マーガレット・ミッチェル、フィッツジェラルド、ヘミングウェイなど。

西、その本たちを指でなぞる。

西「……」

ため息を漏らすと出口へ向かう。

西「ん？」

戻って来て“The Sun Also Rises”を手  
取る。

ページをめくると、間に挟まっている  
紙に気がつく。

「西達治」と書かれた大学のテスト用  
紙である。

驚いて本棚を見渡す西。

西「あ、あの！ここに置いてあるマーガレ  
ット・ミツチエルもフィッツジェラルドも  
オー・ヘンリも、このヘミングウェイも！  
全部僕の本です！」

細見「うちの本が盗品だと言いてえのか？」

西「違います！そうとも言えるかも知れま  
せんが！」

細見「ふざけた事ぬかしてんじゃねえぞ。欲  
しけりや金もってこい」

西「それでは来月まで！来月まで誰にも売  
らないでください！」

細見「そんな面倒くせえことできるか」

西「お願いします！必ず買いますので！」

細見「英語の本なんて買うヤツなんかいいねえ  
よ。まったく。戦争終わってからだ。若い女  
がちよくちよく持つてくるもんだから買  
取ってやったが、しくじったな」

西「若い女……」

ふと振り返る。

書店の表から洋子が西を見ている。

西「！」

消える洋子。

西「洋子さん！」

慌てて追いかけていく。

○桜並木の道

西が足早に歩く洋子の後ろから追いか  
けていく。

西「洋子さん」

洋子「……」

西「僕が死んだって聞いて近所の人たちが僕  
の物を持って行ったとき、洋子さんは僕の

本を持って行っ……、借りて行かれていた  
という事ですよね」  
洋子「借りたのなら古本屋にあるわけがな  
いじゃないですか。達治さんは男ですし、  
立派な家にはお母様もいて。女が一人で生  
きていくのがどれほど大変かなんて知りま  
せんよね」  
西「古本屋の主人が戦争終わってから持ち込  
まれたと言っていました。それまで本はどこ  
に？」  
洋子「家ですよ。あの人も知人のだって言っ  
たら許してくれました」  
西「旦那さんも読まれる方なんですね」  
洋子「英語の本とは思ってなかったようです  
けど」  
西「……」  
洋子「いつまで付いてこられるのでしょうか？」  
西「そっちらは僕の家の方なので」  
洋子「立ち止まる洋子、西を振り返って。」  
西「僕は何も責めてません。むしろ、僕の本が  
少しでも洋子さんに役立てたのなら、それ  
はそれで……」  
洋子「達治さんが生きて戻って来たから！  
死んだって聞いてたのに生きて戻って来た  
から！ あの人も戻ってくるんじゃないか  
って私に思わせて！ とっくに戦死したこ  
と分かってたのに！」  
西「旦那さん、戦死されていたんですか？」  
洋子「だから達治さんが悪いのです。あの  
人が生きてるなんて希望を私に持たせて！」  
西「きつと生きてます！ あれですよ！ ま  
だシベリアとかに」  
洋子「あの人は海軍なの！ 乗ってた巡洋艦  
が沈められて」  
西「……」  
洋子「このついでにお話ししますが、私  
また結婚の話が来ているのです」  
西「結婚……」  
洋子「あの人の弟です。でも、あの人は比べ

ものにならない男で。兄が死んだから自分が家と店を継げるって意気揚々としてて。最低です」

西「でしたら結婚なんてすることないですよ」  
洋子「私、言いましたよね。女一人で生きていくことがどれほど大変かと」

西「でもそんなこと……」  
洋子「では、達治さんが私と一緒にしてくれるんです？」

西「はい？」  
洋子「私と結婚してくれるなら、私嫌な人と結婚しなくて済みます」

西「あ、えつと……。僕、来週から例の日本語調査の本番が始まって。それ終わっても結果報告をまとめるまでは忙しくて」

洋子「そうやっていつもはぐらかされるのですね。達治さんは私のことを」  
西「違うんです！」

西「右手を見つめる。  
「自分は絶対に人を傷つけられない人間だと思っていたんです。戦争でも運が良いのか悪いのか、敵を一人も殺すどころか傷つけずに終わって。でも、戦争から帰って来

てから僕は人を殴れる人間になってしまいました。この手で。親友を。酔っぱらいを。どうしても自分を止められなくて」

洋子「……」  
西「この手がいつ洋子さんを傷つけるかもしれないと思うと、僕が洋子さんと一緒にいるなんて」

洋子「優しいんですね、達治さん。でもいくじなしです」  
西「……」

洋子、来た道に戻る。  
西「洋子さん、どちらへ？」

洋子「家に帰るのです」  
西「うちはこっちです」  
洋子「あの人の実家です。電車ですぐなので」  
西「洋子さん。僕にできることがあれば」

そのまま去っていく洋子。

立ち尽くす西。  
遠くなつていく洋子の背中を見つめる  
ことしかできない。

○小学校・控え室

T「1948（昭和23）年8月8日」

西が座っている。

田尻が時計を確認して。

田尻「時間です。お願いします」

西が何かを包んだ風呂敷を手に部屋を  
出て行く。

○同・廊下

西が控え室から出てくる。

そのまま廊下をどンドン歩いて行く。  
教室の扉を開ける。

○同・教室

西が入ってくる。

綺麗な開襟シャツを着た人、汚れた農  
作業服の人、洋服、和服と幅広い年齢  
層の男女が席に着いている。

教壇に立つ西。

西「本日はお忙しいところをわざわざおいで

くださいましてありがとうございます。た  
だ今から、これから国語をどうしたら

いか、国語の教育をどう改めたいか  
ということを知るための読み書き調査を始  
めます」

テスト用紙が出席者に配られる。

西「全員に用紙が渡ったことを見て。

西「いいですか？ ではこれから、わたくし

が書き取ってもらうことばを一つ一つ言  
いますから、よく耳をすまして聞いてくだ

さい。はつきり聞き取れなかった人は、手  
を挙げてください。そのときは、もう一度繰

り返して言います」

西「西に注目している出席者たち。

西「それでは、まず上の段を右から左にやっ

て行きます。上の段はひらがなで書いてください。ひとつ目。小さい黒丸が一つ書いてあるすぐ下のワクです」

黒板にワクを示す。

西「自分を落ち着かせるように深く息を吐いて。」

西「ひらがなで『さくら』。春に咲く『さくら』です」

出席者たちが解答用紙に「さくら」と書く。

中には「さ」を「ち」と書いたり、カタカナを書いたりしている人もいるが、ほとんどの出席者が正しく「さくら」と書いている。

西「充分間を開けて。」

西「ではふたつ目」

○同・控え室

西がテスト用紙の入った風呂敷を抱えて入ってくる。

田尻がいる。

西「田尻先生、お疲れ様でした。無事終わりました」

田尻「まだ初日です。全国的には明後日十日からですし」

西「日本語、守ることでできますかね？」

田尻「西くん。君はさっきまで何を見ていたのかな？ ほとんどの出席者が答えを正しく書いていたじゃないですか。最後の文章問題まで。きっちり」と

西「しかし……」

田尻「日本人の識字率が高いことなんて今さら調べなくても分かっていたことです。だが、これでG H Qの鼻を明かせますね。ざまあ見ろです」

西「しかし、これで終わりでしょうか。もしかしたら何かの手を使って日本語を潰しにかかってくるかもしれません」

田尻「そのときはまた戦えばいいのです。本当に僕たちが勝ったと分かるのは、そうで

すね……。君が結婚して子供が生まれたと  
する。その子に子供が生まれて、その子に  
また子供が生まれて……。要するに50年  
後、100年後にこの国の子供たちが日本  
語を話していたら、今回の僕たちの戦いは  
勝ちになります」

西「はい！」

田尻「さて、ここからが大変ですよ。採点して  
結果まとめて分析して報告書にして。君は  
ともかく、僕は教授たちに振り回されてま  
た徹夜です」

教室を出て行く田尻。

西「……。西、テスト用紙をまとめると問1に書  
かれた「さくら」の文字が目に入る。」

○文部省教育研究所・調査委員会室

西が入ってくる。

西「河嶋さんが荷物を整理している。」

安斎「なんか河嶋さんが急に辞めると言いだ  
して」

河嶋「世話になったな。どちらかというと世  
話したのは俺の方だが」

西「河嶋さん。また何か問題でも起こされた  
のですか？」

河嶋「こぼがだれが！」  
西「ひっ！」

河嶋「お前も調査会場で見ただろ。採点しな  
くても分かる。かなりの高得点だ。日本語  
がなくなることはない。だからもう俺の役  
割は終わりだ」

西「でも、これからの分析の方が大変だつて  
田尻先生おっしゃってました。河嶋さんの  
ような日本語研究者がいた方が」

河嶋「知るか。俺は国に帰って物書きをさせ  
てもらおう」

西「小説でも書かれるのですか？」  
河嶋「戦争で死んだ連中の話を書こうかと思

つてな」

西「……」

河嶋「これで自分が許させるなんて都合の良いことは思ってたねえが、誰かが最初にやり始めねえとあいつらのこと、忘れられちゃうからな」

西「出版されたら必ず読みます」

河嶋「おうよ」

西「亡くなったたたくさんの人たちも、今頃は南十字星に向かっているんですかね？」

河嶋「読んだのか？ 銀河鉄道の夜」

西「読みました」

河嶋「なあ。お前はもうしてジョバンニだけ帰ってきたのだと思う？ なぜジョバンニはカムパネルラと一緒に銀河鉄道で南十字星へ行けなかった？ 『ほんたうの幸ひ』とはなんだと思う？」

西「『ほんたうの幸ひ』……。そこまではまだ考えて……」

河嶋「ジョバンニは親友のカムパネルラと一緒に旅を続けて目的地へたどり着いた方が幸せだったはずなのに。でも、ジョバンニにとつて、それが『ほんたうの幸ひ』というものじゃなかった。ならば、ジョバンニはどうして悲劇の待つ地上へと戻らないといけないかったのか。『銀河鉄道の夜』は未完の作品だ。これから原稿の発見があり、物語が変わるかもしれない。そのとき俺たちは『ほんたうの幸ひ』が何だったのか、知ることができるかもしれないが、できないかもしれない。それに『鳥捕り』の正体は果たしてなんだったのか……」

苦笑いする西。

### ○ 駅前

行き交う人々。

西と安齋がいる。

西「そんじゃ明日」

安齋「ああ」

別れる二人。

安齋「……」

安齋が意を決した様子で振り返る。

安齋「西。俺、来年に関西の大学の助教授になることが決まってるな」

西「そうか。これでドイツ文学者の道が完全に決まったな」

安齋「そうなると東京にいつ戻ってこられるか分からねえ。すぐはムリだが、ドイツにも留学してみたいし」

西「絶対に行けよ。俺、アメリカに連れて行かれたとき、捕虜のクセにヘミングウェイと同じ地に立っていると思つて泣きそうになつて」

安齋「西。この調査が終わったら仕事はどうする？ 実はアメリカ文学の教授がそのこの大学にもいてな」

西「いや。それには及ばない。小説の翻訳でもやろうかと思つて」

安齋「そうか。それならもう大丈夫だな」

涙を堪える安齋。

西「バカヤロ！。明日も仕事で会うのに、気ま

ずいだろ」

安齋「ああ。そんじや明日な」

西「ああ。明日」

笑顔で別れる二人。

安齋が遠ざかると西の表情が曇る。

○桜並木の道（夕）

西が歩いてくる。

洋子が桜の木の下にいる。

西「洋子さん？」

洋子「お疲れ様」

西「いつもここで会いますね」

洋子「だっていつも待っていましたので。必ずいつか会えます」

西「……」

洋子「どうでした？ 読み書き調査は」

西「子供にひらがなで『さくら』と、名付けられなくなることはないと思います」

洋子「そうですか」

西「……」  
洋子「結婚の話がまとまりました。お義父様にコイツと結婚して家を守ってくれと、大勢の前で言われてしまいました」  
西「それは……。おめでとうございます」  
洋子「うん。あの人が守りたかった家族を私が守らないとバチがあたりますので」  
西「でも、それは洋子さんにとつて、『ほんたうの幸ひ』なのでしょうか？」  
洋子「ほんたうの幸ひ？」  
西「宮澤賢治です。『銀河鉄道の夜』です」  
洋子「西、カバンから宮澤賢治全集を出す」  
洋子「読んでくださいよ」  
西「お貸ししますよ」  
洋子「自分で買います。貸してもらったら、返しに行かないといけませんので」  
西「洋子さん。僕、二年前にアメリカから戻ってくる復員船の上から、浦賀の桜の下で船を見つめている女の人を見たんです」  
洋子「……」  
西「その人、もしかして今でも休みの日に浦賀まで行って、大事な人が戻ってくる船を待っているのではないかと」  
洋子「達治さんは、その人のことどうしてあげたいのですか？」  
西「それは……。その人の心をどうにか助けてあげたいと」  
洋子「どうして、その人の心を助けたいと思うのですしょうか？なぜそのような気持ちになられるのですか？」  
西「……」  
洋子「またそうやって黙り込むのですね。私はずっと待っていたのに。始めて本を借りた時からずっとです。たった一言。一言だけで十分なのに。なんで言ってくれないのですか？」  
西「……」  
洋子「私からは言いませんよ。こうなったら私にも意地があります」  
西「……」

笑顔を見せる洋子。

洋子「分かりました。では元気でね。もう帰らないと遅くなりますので」

西「はい。お体に気をつけて」

洋子「その『ほんたうの幸ひ』ってものがもしあるなら、お互いに見つけましょうね」

洋子が去っていく。

西、洋子の背中を見ることができない。

○西家・お茶の間（夕）

西が入ってくる。

西「ただいま戻りました……」

部屋には大量の本が積まれている。

西「！」

慌てて本を手に取る。

古本屋に並んでいた西の洋書である。

千代が後ろにいる。

千代「あんたはいつも肝心なときにいない！どこで油売ってたのよ！」

西「これ僕の本です！ どうしてここに！」

千代「洋子ちゃんが持ってきたのよ！ お借りしていた本を返しますと」

西「洋子さんが？ でも、この本は古本屋にあつたはずで」

千代「あんたに返すためにお金貯めていたんだと！ うちに一銭も入れないでこそそこそと！」

西「でも、僕は一度も返して欲しいなんて言っていないが」

千代「あんたはどうしてこうもバカなの？ こんなに本読んで勉強して大学まで出て！ 借りた物は返す！ 人の道として当たり前でしょ！」

西「洋子さん。さっき道であつたのに何も言ってくれませんでしたし」

千代「さっき会った？ なにしてんのよ！ なんて紐付けて連れて来なかつたの！」

西「また結婚されるようで」

千代「本人から聞いたわよ！ あんたはいつもウジウジウジウジウジウジウジウジウジ！」

若い娘が一つ屋根の下にいるって言うのに、  
 手も出さないで！」  
 西「出すなと言ったのはお母さんです！」  
 千代「私は上官かい！上官でもたまには刃  
 向かうことくらいしなさい！それにあの  
 子はあるた目的でうちに来たってのが分か  
 らないのかい？」  
 西「へっ？」  
 千代「あの子が桜並木のところで朝から晩ま  
 でウロチヨロしてたから声を掛けちまった  
 んだよ。私はあの子を両親に代わって守ら  
 ないといけないなんて思ったけど、あれは  
 相当な策士だったわね」  
 西「……」  
 千代「あんたが想像以上にいくじなしとは、  
 あの子も思わなかっただろうけど」  
 西「僕は洋子さんと一緒になっではいけない  
 んです」  
 西「自分の手を見つめる。  
 を押さえつけられなくて。どうしても自分  
 戦争に行く前は人を一度も殴ったことない  
 のに、ここ最近二度も……」  
 千代「……」  
 西「頭の中で戦地のことが溢れると止められ  
 ないんです。復員してから家族に手を上げ  
 るようになった人たちの話も聞きますし、  
 その矛先が洋子さんに行ってしまうと思う  
 と……」  
 千代「そのときは私があんた殴り倒して、庭  
 に顔だけ出して埋めてあげるわよ」  
 西「そんなこと」  
 千代「私があんたより弱いとでも？」  
 西「いやあ……」  
 千代「洋子ちゃんもあんたよりずっと強いわ  
 よ。小学生の時、男の子10人まとめてや  
 ったつめたことあったじゃない」  
 西「あれは3人だと……」  
 千代「私は達治が洋子ちゃんに手を挙げるな  
 んて、絶対にはないと思ってるわよ。あなた

はそんなやわな男じゃない」

西「……」

千代「達治。後は自分で決めなさい。親に最後の最後まで言わせるんじゃないよ」

西「はい！ 行って参ります！」

西、部屋を飛び出す。

○同・表（夕）

西が玄関を飛び出して駆け出していく。

○同・桜並木の道（夕）

西が駆けていく。

○同・駅前（夜）

帰りの人々で混み合っている。

西が人の流れに逆らいながら駆けていく。

○同・ホーム（夜）

西がやってくる。

到着する電車。

乗客たちが乗り降りしている。

辺りを探す西。

電車に乗ろうとしている洋子を見つける。

西、再び駆け出す。

洋子が電車に乗った瞬間、その手を掴む。

洋子「達治さん」

西、洋子の手を引いて電車から降ろす。

電車は二人を置いて出発する。

洋子「……」

西「洋子さんはこの電車に乗ってはいけません。洋子さんの『ほんたうの幸ひ』はこの先にはないと思うのです」

洋子「……」

西「それに、本を全部返したから、全部終わらだなんて。寂しいことしないでください。またいつでも貸しますから、いつでも返しに来てください」

洋子「でも今の達治さんの本は英語ばかりで」  
西「片っ端から翻訳します。英語は日本語に。」

ついでに日本語は英語に。それで、洋子さん以外にもたくさんの方が読んでお互いを  
知れば、戦争なんてやらないと思うのです」  
洋子「達治さん。やっぱり凄い人です。頑張つ  
てくださいね」

西「洋子さん。うちに帰りましょう」

洋子「うちとは？」

西「僕のうちです」

洋子「私は一度結婚してる身ですし、また結  
婚をしようとは……」

西「旦那さんのことを忘れて欲しいなんて絶  
対に言いません。散った人たちのことを忘  
れるなんて。そんなこといけません。僕も  
忘れませんから」

洋子「……うん」

頬が緩む洋子。

西も思わずほおが緩む。

洋子「でも、どうして達治さんのうちに私が  
帰らないといけないのでしょうか？ その  
理由はちゃんと話して欲しいです」

西「それは僕が洋子さんと一緒にずっと一緒  
にいたいからです！ 洋子さんといるとき  
だけは戦争のことも忘れられて。僕は洋子  
さんの元から出征して、満州、ルソン、アメ  
リカと遠回りして、洋子さんのところに帰  
って来たのです。宇宙を旅するような長い  
旅でしたが、やっと見つけたんです。『ほん  
たうの幸ひ』というモノを」

洋子「達治さん。お帰りなさい。よくぞご無事  
で」

西「ただいま戻りました」

洋子「どうか末永く、よろしくお願いします」

頭を下げる洋子。

西「よ、よろしくお願いします！ 家では母  
も一緒ですが」

洋子「分かっています」

笑顔を見せる洋子。

笑顔で返す西。

素の表情になる洋子。

洋子「でも、またごまかしましたね」

西「はい？」

洋子「私は昔からずっと待っていたのですよ。言いましたよね？ 小学校の時に本を貸し借りしていた時からずっと、ずっとです。

達治さんに言っただけで欲しい言葉を」

西「な、なんの言葉でしょうか？」

洋子「とぼけないでください。分かっているクセに」

西「分かっているなら、今さら言わなくても問題はないかと思えます。言葉にしろなくても通じるものは多々ありますので。むしろそういう感情の方が文学では大事と云うか」

洋子「でも言っただけで欲しいのです。私はずっと待っていましたので」

西「今じゃなくてもいいかと」

洋子「次の電車は何時でしょうか？」

西「待ってください！ 言いますから！ 言います！」

笑顔で待つ洋子。

西「す……。Like you... No no noi LOVE YOU!」

洋子「日本語で！」

西「好きだ！」

〈終〉

※原文では旧字体の言葉を一部書き改めた部分があります。

【参考文献】

○読み書き能力調査関連

- ・読み書き能力調査委員会編（1951）『日本人の読み書き能力』、東京大学出版部
- ・石黒修（1949）「日本人の読み書き能力調査」『コトバ』復刊2巻、国語文化学会
- ・角知行（2005）『日本人の読み書き能力調査』（1948）の再検証』『天理大学学報』第56巻第2号（通号 208）、天理大学
- ・茅島篤編（2017）『、幻、の日本語ローマ字化計画…ロバート・ス・ホールと占領下の国字改革』、くろしお出版
- ・甲斐睦朗（2011）『終戦直後の国語国字問題』、明治書院
- ・保阪正康（2022）「ローマ字社会になりにかけた日本」『昭和史の核心』、PEEP研究所

○学徒出陣・戦争関連

- ・高戸顕隆（1943）著『学徒出陣』、毎日新聞社
- ・唐沢富太郎（1955）『学生の歴史…学生生活の社会的考察』、創文社
- ・谷木春治（1983）『ルソン島戦闘記録…私の観た、体験したフィリッピン』、谷木春治
- ・下平翅雄（1983）『ルソン捕虜記』、鵬和出版
- ・阿利莫二（1987）『ルソン戦―死の谷』、岩波書店
- ・蜷川壽恵（1998）『学徒出陣…戦争と青春（歴史文化ライブラリー…43）』、吉川弘文館
- ・K・マイク・マスヤマ（2008）『硫黄島日本人捕虜の見たアメリカ…ヘアフター・イオウジマ〜の長い旅』、ハート出版
- ・久野潤監修（2017）『学徒出陣とその戦後史』、啓文社書房
- ・吉田裕（2017）『日本軍兵士…アジア・太平洋戦争の現実』、中公新書

- ・平塚征緒編(2018)『太平洋戦争大全 陸上戦編』、ビジネス社
- ・一橋いしづみの会編(2023)『学徒出陣80年目のレクイエム…還らざる学友たちへ』、ビジネス社

○アメリカ文学関連

- ・ロバート・グラント(1949)「誰がために鐘は鳴る アーネスト・ヘミングウェイ」『アメリカ文学』2巻9号、セルバ出版
- ・阿部知二(1933)「HEMINGWAY 私観 — THE TORNENTS OG SPRINGを中心として —」『英語研究』26巻2号、研究社出版株式会社

○新聞

- ・『朝日新聞』1948年8月5日
- ・『日本経済新聞』1948年8月5日
- ・『毎日新聞』1948年8月5日
- ・『読売新聞』1948年8月5日

【引用・出典】

- ・Ernest Hemingway,(2004)「For Whom the Bell Tolls」, Arrow Books,p485
- ・読み書き能力調査委員会編(1951)『日本人の読み書き能力』、東京大学出版部、p40
- ・宮澤賢治(1934)「銀河鉄道の夜」『宮澤賢治全集第3巻』、文圃堂書店